

# ひょうごの 遺跡

平成22年度(2010)  
8月10日発行

76  
号

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1-1-1  
TEL. 079-437-5589 FAX. 079-437-5599  
ホームページアドレス  
<http://www.hyogo-koukoku.jp>

兵庫県立考古博物館

平成21年度

発掘調査の成果

総まとめ

古墳のつくり方が良く分かる

たかまつ  
高松3号墳

西脇市野村町

加古川に近接して広がる高松古墳群の中で、最も北側の尾根の先端部に位置する古墳です。直径が約15mの円墳で、横穴式の石室が南方向に開いています。

石室の天井は既に失われ、壁も崩壊していましたが、石室の奥側の床には扁平な石を丁寧に貼り、入口には小さな石を積んで塞いでいたことが分かりました。

墳丘は土止めの役割を果たすと考えられる列石を積みながら盛土をおこない、同時に石室を積み上げています。また、墳丘の基礎工事として、もともとの地面を直径10mの円形に掘りくぼめ、そこに固く締まる土を入れたうえで、この固い土を掘り込んで石室の石が据えられています。さらに、この固い土の周囲にも目印となる石を規則的に並べています。

高松3号墳の石室や墳丘の築造の方法と順序を、この発掘調査によって明らかにすることができました。

列石を巡らす古墳



遺跡は、加古川西岸の川に向かって突き出た尾根上に位置しています。今回の調査で古墳（5世紀頃）と鎌倉時代（13世紀）に造られた経塚が発見されました。

経塚は、平安時代終わり頃に盛んとなった末法思想により、仏教の教えを後の時代に残すため、紙や石などに書いたお経を陶製や銅製の容器に入れて土中に埋めたものです。ここでは、土師器製の経筒1個と須恵器の甕2個が埋められていました。甕は周りに石を組んで据えられ、大きな石で蓋がされていたようです。一方、経筒には土師器製の蓋が被せられていました。後の時代に盗掘されたため、この経筒や甕の中にはお経をはじめとして、何も残されていませんでした。



須恵器甕



土師器製経筒



調査区全景（南から）



経塚（東から）



石棺（北から）

経塚以外にも、遺骸を納めた埋葬施設（古墳の可能性が高い）が2箇所で見つかっています。

まず、尾根の上部に位置するものは、板状の石材を組合わせて造られた石棺です。棺内の西端には石枕（遺骸の枕として据えた石）が置かれていたことから、頭を西にして葬られたことが分かります。さらに、その付近には刀子（ナイフ状鉄器）・ヤリガンナ（ナイフ状のカンナ）と考えられる鉄器が添えられていました。また、尾根の下方に設けられた埋葬施設は、小型の竪穴式石室であったと思われますが、後の時代の盗掘などによってひどく破壊されています。この石室の中からは、副葬品などはまったく出土しませんでした。

どちらからも土器が出土していませんが、施設の特徴などから、古墳時代の前半頃（4～5世紀）に造られたものと想定されます。



加古川西岸の微高地上の狭い範囲で、古墳時代後期（6世紀）の竪穴住居跡3棟が見つかりました。一辺5m～7mの方形（四角形）の竪穴住居跡は、やや位置をずらしながら、ほぼ同じ場所で建て替えられていました。最も新しい住居の壁際には、カマドがついていました。また、この他に奈良時代（8世紀）の溝や土坑（ゴミ穴）などの遺構が見つかり、弥生時代中期（紀元前1世紀）の土器や近世（19世紀）の陶磁器なども出土しました。



古墳時代後期の竪穴住居跡（東から）



住居跡のカマド（東から）

## 弥生時代の墓域を発見

つ ま い せきぐんにししま ち く  
津万遺跡群西嶋地区

西脇市西嶋

加古川西岸の平野部の微高地上に位置しています。弥生時代後期（2世紀）の木棺墓・土坑・溝、古墳時代後期（6世紀）の土坑、奈良時代（8世紀）の溝、中世（13世紀）の掘立柱建物跡、溝などが検出されました。弥生時代の木棺墓は3基検出されました。木棺墓は側板の痕跡が確認できましたが、小口板の痕跡は確認できなかったことから、側板を土で押さえただけの簡素なものだった可能性があります。土坑・溝を含めて弥生時代の遺構から出土した土器は細片のため、詳細な時期は不明です。また、古墳時代後期の土坑からは須恵器蓋杯・壺などと一緒に製塩土器が出土しています。



調査区の全景（南から）



弥生時代の木棺墓（北から）



加古川の堤防から西に約60m離れた場所で、国道372号野村河高バイパス整備に伴い、新しく建設される橋の橋脚部分について発掘調査を行いました。発掘調査面積は約100㎡です。

地表から約1mの深さで、弥生時代末から古墳時代初頭（3世紀前後）の竪穴住居跡を1棟発見しました。1辺の長さが約5.5mの正方形です。地山（遺構検出）面からの掘り込みの深さは約40cmで、中央部付近に直径約60cm・深さ約10cmの穴（土坑）を1カ所見つけました。住居跡は半分だけを発掘しましたが、柱穴の配置から直径約30cm・深さ約30cmの柱穴が4カ所と推定できます。

この住居跡からは、約20箱（1箱：28リットル入り）分もの大量の土器が見つかりました。今回の調査では住居跡が1棟確認されたのみでしたが、地形の状況から、この住居の南北方向に集落が広がる可能性が高いようです。



発見された竪穴住居の調査（東から）

## 二時期に同じ場所が選ばれた集落跡

### こうだにかいげんぎょう いせき 神谷戒現行遺跡

宍粟市山崎町

宍粟市山崎町神谷にあり、県道拡幅工事に先だって本発掘調査を行いました。

狭い範囲にもかかわらず、弥生時代中期（紀元前1世紀頃）と古墳時代後期（6世紀）の遺構を数多く検出しました。

写真手前の溝や土坑（穴）はすべて弥生時代中期のもので、手前左端の溝は、斜面に石を貼り四辺に溝を掘った方形台状の墳墓の一部である可能性があります。また、写真一番奥には円形の竪穴住居跡も発見されました。

古墳時代の竪穴住居跡は、弥生時代の溝・土坑と竪穴住居跡の間で2棟見つかりました。どちらも平面方形で一辺4.5m程度の大きさですが、写真奥側のように調査区の両側外にのびているものや写真手前のように後世に壊されたものもありました。しかし、住居跡の床面には多くの土器が残っていました。

今回の調査によって、弥生時代と古墳時代の人々が同じ場所を選んで生活していたことや、周辺にはまだ多くの遺跡が埋もれたまま残っていることが分かりました。



調査区南半部の古墳時代住居跡と弥生時代遺構（北から）



飛鳥時代（7世紀）から平安時代（9世紀）にかけての水田跡を発見しました。

遺跡は、志筑川河口近くの沖積地にあります。何回もの洪水砂が遺構面を覆っていることから、洪水によって水田が埋まるたびに復旧し、耕作していたことが分かります。今回の調査で大きく上下2層で水田跡を検出するとともに、この調査が淡路市内での初の水田遺跡の調査となりました。

遺跡の周辺には、淡路島で最も早くに創建された志筑廃寺や「ミヤケ谷池」といった古代集落に関連する字名が存在しており、古くから開けた場所だったと思われます。今回見つかった水田跡もまた、古代の土地開発に伴い広がったと考えられます。遺跡からは、水田畦畔や水路・護岸施設のほか、土器や、祭祀に使用された土馬、木製祭祀具なども出土しています。

興味深いことに、今回見つかった水田跡の畦畔の向きは、飛鳥時代（下層）には、現在の水田と同じ方向であった可能性が高いのですが、志筑廃寺が創建された奈良時代（上層）には廃寺と同じく東西南北の正方位に向きを変えています。平安時代（上層）に入ると、再び現在の水田と同じ向きに方向を変えますが、同時に寺の施設もそれと同じ向きに造り直されています。これは、志筑廃寺周辺に極めて計画的な土地区画が存在した可能性を示していることとなります。

古代の志筑廃寺周辺の状況は、今年度の横入遺跡の調査によって更に明らかになると期待されます。



奈良時代から平安時代の上層水田



飛鳥時代の下層水田



上層水田の水口付近で祀られた土師器甕



馬木遺跡は洲本市街地の西側、洲本川支流の樋野戸川沿いに位置する弥生時代前期（紀元前4世紀）～中期（紀元前2世紀）の遺跡です。県営住宅の建て替えに伴い発掘調査を行い、弥生時代中期の建物の柱跡や、弥生時代前期の土器を焼いたと思われる遺構などが見つかりました。周辺の地形などから推測すると、調査した場所はムラの周縁部であり、中心はその北側にあるようです。

また、川跡などから多量の弥生土器片が出土しました。馬木遺跡周辺にはいくつかの弥生時代前期のムラがあり、淡路島の対岸となる紀伊地方（和歌山県）の特徴をもつ土器（紀伊型甕）が出土していますが、本遺跡ではそのような土器が見つかりません。さらに検討を加える必要がありますが、このムラの性格を考えるうえで重要なポイントになりそうです。



土器を焼いたと思われる遺構（北東から）

## 湿地に面したムラで使われた道具が出土

### うねむれ いだいせき 有年牟礼・井田遺跡

赤穂市有年牟礼

有年・牟礼井田遺跡は千種川の支流、矢野川にの左岸に立地する遺跡です。一般国道2号相生有年道路事業に伴い、有年牟礼・井田遺跡の最も東端にあたる箇所を調査しました。

調査区のほとんどは埋没した旧河道で占められていましたが、最終段階の河底や埋土中からは弥生時代後期（2世紀）から室町時代（15世紀）にかけての各時期の土器が出土しています。調査区の西側では、小さな土坑（穴）が検出されています。

調査区のすぐ北側では、過去の発掘調査によって弥生時代中期中頃（紀元前2世紀）の集落が確認されており、焼失住居（火事にあって焼けた住居）の跡も発見されています。今回の調査区は集落の東のはずれに相当すると考えられます。

今回の調査では、弥生時代の石器である緑色岩製の環状石斧やサヌカイト製の石匙も見つかり、周囲の集落に暮らす人々が使っていた道具だったのかもしれません。



弥生時代の石器（左：環状石斧 右：石匙）



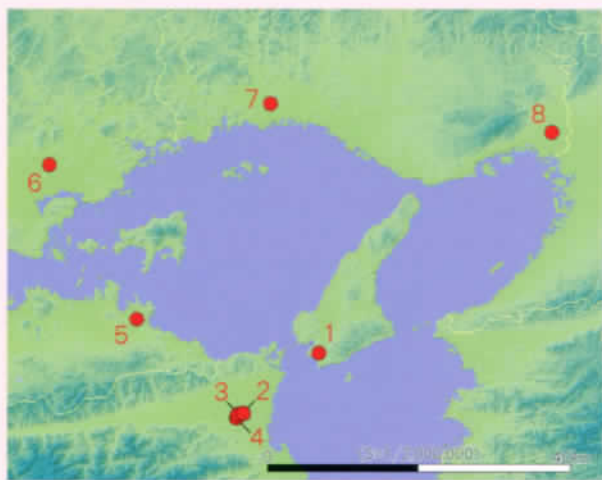
調査区の全景（北東から）

## 波状口縁甕

この写真の土器は、口縁部（口の部分）が花びらのように波打っていますね。さらにこの土器を上から見ると、楕円形をしています。この土器は弥生時代前期後半（紀元前4世紀）の甕ですが、弥生土器の中でもほとんど見られない不思議な形をしています。

このように口縁部が波打ったり、上から見た形が楕円形をしているのは、縄文時代晩期の土器の特徴です。粘土紐を貼り付け刻み目を施した帯（突帯）や、底部が外側に踏ん張る特徴も、縄文時代の伝統を引き継いだ古い特徴なのです。

波状口縁をもつ甕は東部瀬戸内地域の沿岸部に分布し、特に徳島市から香川県東部にかけては一つの遺跡から複数出土するなど分布の中心となるようです。



波状口縁甕の分布（中村2002を改変）

### 参考文献

中村 豊 2002 「前期末・中期初頭の諸問題 徳島地域」『弥生時代前期末・中期初頭の動態』古代学協会四国支部



井手田遺跡から出土した波状口縁甕

この土器が出土した南あわじ市井手田遺跡は淡路島の南端に位置し、鳴門海峡を挟んで徳島地域と向かい合う地に営まれています。井手田遺跡では、徳島地域と共通性を持った石器や方形周溝墓が発見されており、深い結びつきを持っていたことがうかがわれます。（井手田遺跡の発掘調査成果については、『ひょうごの遺跡62号』に紹介しています）

- |           |           |
|-----------|-----------|
| 1 井手田遺跡   | 2 庄・蔵本遺跡  |
| 3 南庄遺跡    | 4 名東遺跡    |
| 5 鴨部・川田遺跡 | 6 百間川沢田遺跡 |
| 7 丁・柳ヶ瀬遺跡 | 8 上ノ島遺跡   |

## トライやる・ウィーク

今年度も中学2年生対象の「トライやる・ウィーク（職業体験）」の受け入れを行いました。博物館職員の一員として、裏方的な仕事を中心として、様々な業務にチャレンジしてもらいました。

写真は、姫路市飯田遺跡の発掘調査（『ひょうごの遺跡』72号で紹介）でみつかった土器の接合（破片をパズルのように繋ぎ合わせる仕事）に挑戦しているところです。根気を必要とする作業ですが、ぴたっと破片が合った時の感動を、今後大切にしてもらいたいと職員一同願っています。



土器の接合体験



## 特別展 茶すり山古墳 —巨大円墳に眠る但馬の王—

朝来市にある茶すり山古墳は、直径約91mの近畿地方最大級の円墳です。発掘調査された長大な木棺から、大量の武器・武具などの副葬品が見つかり、全国の考古学ファンの注目を集めました。平成15年度にはその重要性から国の史跡に指定され、南但馬地域の貴重な歴史文化遺産として保存活用されています。

出土品の整理作業・保存処理が完了しましたので、今回の展示会で鏡・剣・玉、そして甲冑や盾、埴輪など豊富な出土品を一挙に公開します。倭の五王の時代（古墳時代中期・5世紀）に、強力な軍備を備えた但馬王の実像に迫ります。

- 開催日時  
平成22年10月2日（土）～11月28日（日）
- 観覧時間  
午前9時30分～午後5時（入館は午後4時半まで）



### 平成22年度 発掘調査予定一覧

平成22年度は、下の表のような遺跡の発掘調査を予定しています。今後の事情により、予定が変更される場合もありますが、どうぞ調査成果にご期待下さい。

No	事業者	遺跡名	種別	時代	所在地
1	国土交通省	津万遺跡群	集落跡	弥生～中世	西脇市
2		有年牟礼・井田遺跡	集落跡	弥生～中世	赤穂市
3		池田古墳	古墳	古墳	朝来市
4	県土木事務所他	豊地城跡	城跡	戦国	小野市
5		宮ノ谷古墳群	古墳	弥生～古墳	朝来市
6		横入遺跡	集落跡	古墳～古代	淡路市
7		(姫路競馬場内)	—	—	姫路市
8	西日本高速道路㈱	大池ノ南遺跡	集落跡	近世	三田市
9		No.15地点	—	—	神戸市北区



### 編集後記

当館では、伝統的な日本の年中行事のなかで、考古学と関連の深い行事の再現＝体験事業を季節毎に実施しています。例えば、夏越しの祓えとして6月には、「ひとがた流し」を行い、多くの方の参加を頂きました。ここでたくさんの穢れを流した御利益でしょうか、6月にはめでたく50万人目の入館者の方をお迎えすることができました。同時期に開催していました特別展「山名氏の城と戦い」も好評を頂き、戦国時代の人気を改めて知ることとなりました。今年度は上の表のとおり、弥生時代から中世さらには、近世の遺跡を発掘調査する予定としています。戦国時代だけではなく、各時代のすばらしい調査成果を、皆さんにお伝えできるのではないかと考えています。どうぞ、ご期待ください。



22教 ① 2-015A4